

〈2016 年度企画の趣旨〉

「東方神化思想と西方神秘思想」というテーマが示すとおり、中世キリスト教思想における「御言、イエス・キリストの受肉」という神秘をめぐる、異なる両者の思想の歴史的展開を対比・相対化することが2年にわたる本シンポジウムの趣旨である。そのことによって、中世キリスト教思想がもつ普遍的かつ豊饒な思想の内実の一端を理解するための様々な視点を得られるのではないだろうか。

2015 年度の一連のプログラムではカパドキア教父に至るまでの古代教父たちにおける初期神化思想について俯瞰し、東方と西方両者に共通する水源としての擬ディオニュシオスの『神名論』における肯定神学と神化思想から始まり、その後の証聖者マクシモス、グレゴリオス・パラマスを取り上げ、東方神学が捉えるキリストの受肉ひいては復活の意味について深い洞察がなされた。

2016 年度のプログラムでは、まず「シンポジウム連動報告」として八巻和彦氏に擬ディオニュシオスの西方における受容と影響の歴史を概観していただき、東方と対比させる仕方でベルナルドゥスや女性神秘主義思想にみられる西方固有の神秘思想の特徴を浮き彫りにしていただく。提題ではさらに具体的に西方神秘思想について検討する。(1)田島照久氏にエックハルトにおける神認識について、(2)阿部善彦氏にクザーヌスにおける神直観について、(3)鶴岡賀雄氏に十字架のヨハネにおける神との合一についての提題をお願いします。2015 年度に取り上げた東方神化思想の理解に加えて、中世後期から近世に至る西方神秘思想の歴史的展開を追うことによって、その結果として——両者の異質性であれ同質性であれ——、中世キリスト教思想をとらえる新しい視座が得られれば幸いである。

2015-16 年度シンポジウム企画委員：

井上 淳，上村直樹，小林 剛，河野一典（文責）
